

# いつか、大切なところ

魚住 直子 文  
うおずみ なおこ

くまおり 純 絵  
くまおり じゅん

タタン、タタン、タタン。

タタン、タタン、タタン。

電車は軽かろやかなリズムでゆれている。あと十分でとうちやくだ。もうすぐ友達に会えると思うと、亮太りょうたはわくわくした。

四年生が終わった春休みに、亮太は父さんの転勤きんで引っこした。電車で二時間はなれた町だった。

引っこすことになったと初めて聞いた夜を、今でも覚えている。知らない所に住み、知らない学校に行くなんて、考えただけでど

14-1

- A4の用紙で印刷してください。
- 点線で切ると実際の大きさになります。



きどきした。三年、四年と同じク  
ラスになった一平いっぺいや駿しゅんと、とて  
も気が合っている。仲のよい友達  
と別れるのはぜったいにいやだ。  
ショックでねむれず、常夜灯のた  
よりない光を見つめ続けた。

終業式の日には雲一つなく、よく  
晴れていた。青空の下、亮太はな  
みだがあふれた。一平と駿もしき

### 漢字

135 ページを見よう

常夜灯 ジョウ  
しきり

14-2

15-1

- ・ A4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。

りに目をこすった。

それからひと月がたち、四月の終わりの休日に、一平と駿に会いに行くことにしたのだ。待ち合わせは前の小学校の校庭だ。

一人で電車に乗り、前の町に行く。いや、「行く」じゃなくて、

「帰る」だ。亮太にとっての自分の町は、今でも前の小学校がある町だ。そして、それはこれからも永遠に変わらないと決めている。自分の学校に帰れるんだ。そう思うだけでむねがはずんだ。

まどの外がまぶしい。亮太は景色をながめながら、電車のリズムに体をゆらしていた。

校庭に入った亮太は、びっくりして思わず立ち止まった。

だれもいない校庭に、一平と駿だけが待っていると思っていた

16-1

15-2

- A4の用紙で印刷してください。
- 点線で切ると実際の大きさになります。

のに、たくさん人がいる。ジャンブルジムに上ったり、走り回ったり、縄とびをしたり。低学年の子が多いが、まるで休み時間のようだ。

ずっと前に、校庭を開放している休日に来た時は、がらんとしていた。今日は天気がいいからだろうか。

鉄棒ぼうの近くに駿しゅんがいる。だれかといっしょだ。でも一平いちへいじゃない。あれはたしか、四年の時、となりのクラスだった森田もりた君だ。

「駿」

亮太がよぶと、すぐに気がついた。

「おおっ。」

永遠  
エイ

16-2

17-1

- ・ A4の用紙で印刷してください。
- ・ 点線で切ると実際の大きさになります。





駿が笑顔<sup>えがお</sup>で走ってくる。

それと同時に、後ろから「亮太。」と声がした。ふり向くと「平だ。校門から走ってくる。」

一平と駿が、前と後ろからやってくる。二人にはさまれ、亮太はうれしくてむねがいっぱいになった。

「元気だった？ 学校はどう？」

「もう慣れた？ 友達はできた？」

二人が次々にたずねる。

「ちよつとは慣れたかな。クラス

17-2

- A4の用紙で印刷してください。
- 点線で切ると実際の大きさになります。





は一つ多くて、四クラスあるんだ。友達も、まあまあできたよ。」  
「よかったね。」

駿がほっとしたように笑った。一平もうなずく。

「それで一平と駿はどう？ クラスは別になったんだよね。」

「そうなんだ。一組と三組に別れたんだよ。」

一平が答えた。

慣れるなれる

17-3

18-1

- A4の用紙で印刷してください。
- 点線で切ると実際の大きさになります。